

笑が
その
いち

日蓮大聖人の教えを正しく伝える法華宗



十(十一)月十三日、宗祖日蓮大聖人が入滅され、各寺院ではその日の前後に御会式法要が奉修されます。宗祖入滅当時、桜が咲き誇っていたという伝承から、この時期の桜を御会式桜と呼び、法要当日には遺徳を偲び、桜を形取った万灯等が寺院によっては奉納されています。私達は、法要を通じて報恩の思いを巡らし、生涯を賭して法華経弘通を目指された宗祖の思いを知ることができのです。

日蓮大聖人は、建長五年(一二五三)四月二十八日、旭森において、朝日に向かって南無妙法蓮華経と唱え、法華経弘通を決意されました。七年後の文応元年(一二六〇)七月には、鎌倉幕府の前執権北条時頼に『立正安国論』を進覧したのです。宗祖は『立正安国論』において、

「汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり。仏国それ衰えんや。十方は悉く宝土なり。宝土何ぞ壊れんや。国に衰微なく、

土は破壊無くんば、身はこれ安全にして、心はこれ禅定ならん。この詞この言、信ずべく崇むべし。」

と進言しましたが、残念なことに、北条時頼はこれを黙殺し、この後宗祖は数々の法難を受けることとなります。

私達は生活する上で、お盆やお彼岸等といった先祖供養や、自身の利益につながる行事については参加しがちです。一方、御会式法要は、お寺にお詣りに行く機会が少ないかもしれません。しかし、日蓮大聖人が法華経こそが釈尊の真実の教えであり、南無妙法蓮華経とお唱えしていなければ、現在の法華宗における、先祖供養や種々の祈願法要は成り立ちません。今年はずいとも、各寺院で奉修される御会式法要に参加し、御宝前に鎮座する宗祖に思いを馳せ、南無妙法蓮華経のありがたみを実感してみてもどうでしょうか。

